

対面相互行為を通じたトランスダンスの出現

——米国黒人ペンテコステ派教会の事例から——

野澤 豊 一

金沢大学客員研究員 E-mail: toyoichi_nozawa@hotmail.com

本稿では、米国黒人ペンテコステ派キリスト教会で実践される儀礼的トランスダンス「シャウト」の成立過程を例に、トランスダンス出現のメカニズムとその表現上の特性について考察する。従来の研究では、トランスダンスは文化的に構築された表象として理解されてきたが、この接近法はペンテコステ派の実践の核心にある「非決定性」を正しく把握するのに重大な余地を残している。「非決定性」とは、礼拝におけるシャウトの即興性やペンテコステ的な信仰を支える受動性を包含する概念である。この非決定的なプロセスを可視化するために、本稿では、シャウト出現時の即興的な信者間のやりとり（及びそこで成立する関係性）に注目し、シャウトが出現するメカニズムを「相互行為の構造」として把握する。それによりシャウトは、〈没入者（シャウトする者）〉とそれに対する〈関与者〉との間の、「〈没入－関与〉関係」から出現すると記述することが可能になる。

こうした用語が有意味なのは、シャウトの正しい成立にあつて、シャウトが踊られること自体よりも、〈没入－関与〉関係の十全な成立の方が有意な場面があるからである。これらの場面からは、対面相互行為における個人の没入行為が、他者との相互的な自発性によってはじめて達成されるという事実が確認できる。これが相互行為の相におけるシャウトの「非決定性」の内実であり、これには対面相互行為に本来的な「ユーフォリア」が伴う。

シャウトという身体的表現は宗教的には「聖霊の働き」と解釈しうる。だが、その出現過程を関係性から記述することは、シャウトが、他者との関係性の切り結びを希求する、「表情性」豊かな身ぶりでもあるという発見につながる。相互行為としての非決定性と身ぶり表現としての表情性という2つの特性は、シャウトという超越体験と日常性とのつながりを視野に入れることによって、はじめて意義深いものとして発見されるといえる。

キーワード：トランスダンス、対面相互行為、アメリカ黒人、ペンテコステ派教会、音楽

目次

I 序論

II 調査対象の概略

III シャウトにおける〈没入－関与〉関係

1 〈関与〉とは何か？

2 〈没入－関与〉関係

IV 〈没入－関与〉関係を成立させようとする〈要求〉と〈期待〉の身ぶり

1 〈要求〉の身ぶり

2 〈期待〉の身ぶり

V シャウトが不発に終わるとき

1 〈期待〉+〈要求〉と状況との間で行われる〈綱引き〉

2 過剰なものとしてのシャウト

VI 考察と結論

1 シャウトにおける相互行為の構造と「ユーフォリア」

2 トランスという身ぶり表現と「表情」

3 結論

I 序論

アメリカ合衆国の黒人キリスト教会、特に「ペンテコステ派」と呼ばれる宗派の教会は、会衆の歌唱を始めとする音楽を多用した礼拝で知られている¹⁾。本稿では、ペンテコステ派を中心とした黒人教会で実践されている(憑依)トランスダンス²⁾、「シャウト (*shout(ing)*)」が発生する際の信者間のやり取りを、微視的に記述する。これにより、トランスダンス発生メカニズムについて、これまであまり議論されることのなかった、しかしながら重要と思われる側面について考察することを目的とする。シャウトは礼拝(およびその他の集まり)で実践されるが、その場面を大まかに描写すれば、次のようになる。(シャウト自体の詳細はII章で行う。)

——礼拝の最中に、牧師が説教を行っている。説教が佳境に入り、その声調も明確に大きく拍節的になると、それまでもいくらかあった会衆の発話や挙手による応答が徐々に大きくなる。音楽家も説教に伴奏を加え、会衆の熱狂(拍手、「ハレルヤ!」等の発話、異言など)はさらに大きくなる。突然、周囲から目につきやすい位置にいる信者の1人が、苦しい表情で律動的に飛び上がり始めると(これがシャウトに特徴的な動きである)、音楽家もすかさずそれに合わせて、テンポの速い音楽を演奏する。シャウトする者の周囲にいる信者は、音楽に合わせて手拍子をしている。音楽が鳴っている間、別の信者数名もシャウトを始める。これが数分間ほど持続し自然と収束に向かう。——

文化的表象としてのトランスダンスに対する人類学的接近法は、大まかに次の3つに区別できる。まずは、音(やその他の)象徴が、生理的・身体的な個人に働きかけて、儀礼的トランスを引き起こすという説明である。たとえば、シャーマニズムや通過儀礼においては打楽器の使用が文化的差異を超えて見出されるが[NEEDHAM 1967]、その際に起こる儀礼的トランスは、音象徴の反復的な刺激などが自律神経系を活性化させるために起こるというのである[LEX 1979; BECKER 2004]。音楽的な礼拝で発生する米国黒人ペンテコステ派教会のトランスダンスも、当然この議論の射程内に入る。しかしここには、トランスの文化的側面が捨象されるという、明らかな限界がある。

第二の立場は構造機能主義的な説明である。これによると、トランスダンスを含む忘我的な宗教実践は、社会的周縁や[ターナー 1976; ルイス 1985]、社会の組織化及び役割分化の程度の低い社会[ダグラス 1983]に見出される。現在のシャウトは、20世紀初頭の都市黒人労働者階級社会で成長したペンテコステ派教会

の実践に直接遡ることができ、その歴史的・社会的な背景と教会組織のあり方は、この説明体系によく一致する [FRAZIER 1974]。しかし近年において、シャウト等のトランスを伴う「霊的」な諸行為が特定の宗派や人種や階級を越えて実践されているという事実を考慮に入れると [COX 2001]、この枠組みにも時代的な制約があったことが分かる。

第三の接近法は、憑依トランスダンスが個別の文化でいかに解釈されているのかを、民族誌的な厚い記述のなかで明らかにしようとするものである。たとえば、(アフリカをはじめとする)多くの社会では、音楽を伴う憑依トランスダンスが「治療儀礼」の一部として実践されている。この時、憑依トランスという表象は、各々の文化における「治療」概念や憑依霊の観念などの総体を体系的かつ精緻に記述することで、その内側にある程度整合的に位置づけうる [BERLINER 1978 ; BLACKING 1995 : chap. 6 ; CRAPANZANO 1973 ; EMOFF 2002 ; FRIEDSON 1996 ; KATZ 1982]。たとえば R. KATZ [1982] は、クン・ブッシュマンの治療儀礼でのダンスの熟達を、霊的エネルギー (*num*) の教育と習得のプロセスとして詳細に描いた。また S. FRIEDSON [1996] は、マラウイのトゥンブカによる治療ダンスの研究において、自らの憑依ダンスの経験を出発点にしつつ、「血」や「熱さ」と音楽やダンスの隠喩的なつながりが治療儀礼のリアリティを構成すると論じた。

シャウトの人類学的理解におけるこの接近法の重要性は疑いえない。しかしこの方法では、筆者が本稿で問題にしたい、シャウトというトランスダンスの「非決定性」という特徴に必ずしも焦点が当てられない。「非決定性」は、もっとも見えやすいところでは、礼拝における即興性として現れる。すなわち、シャウトは礼拝(およびその他の集まり)で起こるものだが、どの礼拝でも必ずシャウトが発生するわけではない。また、礼拝中にシャウトの発生しやすい場面はあるが、そこでも常にシャウトが起こるのではない。「非決定性」はまた、ペンテコステ派の実践における個人の信仰も支えている。信者の信心の真正さを証明するとされる諸行為の多くは、聖霊 (*Holy Spirit*) の満たしによって起こるとされている。この時、それらを引き起こす聖霊は基本的に「賜物 (*gift*)」によってしかもたらされないと語られるのだが、その一方では信者自らが積極的に信心に踏み入らなければならないということも繰り返し語られる。ここにみられる「受動性」と「能動性」との組み合わせこそが、信者と神性との結びつきを確固たるものにしていくのである [CSORDAS 1990 : 28-29]。

人々の実践を「文化という客観的な構造のなかに埋め込まれ」たものとして提示する [田辺 2003 : 98] 文化人類学的な異文化理解の戦略にあっては、トランスダンスのこの側面は問題の中心に据えにくい。シャウトをある特定の慣習によって文化的に構築された表象と理解することは、それに一つの概念的意味を付与する記号論的な見解に基づく。だがこの見解はシャウトの即興性や、ある場面でのシャウトが複数の解釈を呼びこす可能性³⁾、そしてペンテコステ派の実践の核心の把握に、重大な余地を残している。それに対し「非決定性」の問いは、記号論的な接近法の空白を埋める可能性をもつ [cf. CSORDAS 1994 : 4-5]。

この非決定的なプロセスを可視化するための第一歩として、本稿ではまず、シャウトが近接する他者の身体的で即時的な働きかけに大きく左右されることを示すことから始める。ここで出発点とするのが、E. ゴッフマンの対面相互行為論、特にその「焦点の定まった集まり」という概念である。焦点の定まった集まりとは、居合わせた複数の人々が注意を視覚的および認知的に単一の焦点に集中し、かつそれを維持し

ようとする相互行為が起こる場面のことであり、その典型は会話や、対面で行うダンスやゲームである [ゴッフマン 1985 : 4-5]。この概念の独自性は、集まりが「より大きな世界」からある程度独立したものであるとして、それ自体のルールが分析に値するとされている点にあるが [ゴッフマン 1985 : 62-63, 79]、ここにはシャウトの即興性を正しく把握する潜在力がある。

憑依トランスダンスにおける焦点の定まった集まりの存在は、部分的に示唆されるのみか [FRIEDSON 1996 : 126]、「演奏家—踊り手」という単純化された役割間の相互行為として提示されるにとどまってきた [BOURGUIGNON 1976 : 22-23 ; ROUGET 1985 : 102-111]。歌唱と踊りの場に存在する相互行為の動態を詳細に記述した例外的な試みに、都留泰作 [2010] によるバカ・ピグミーの精霊儀礼の研究があるが、ここでは、踊りの空間的配置と身体動作のパターンは、「エスカレーション」を生み出すための「技法」や「工夫」として論じられている。それに対して本稿で主に論じるのは、「踊り手」や「儀礼遂行のリーダー格」といった特定の役割を担う者の技法や意図に還元しえない、シャウト発生時の相互行為に内在する非決定的な性質である。

こうした相互行為の動態を明らかにしようとする時、記述の対象は「関与 (involvement)」、すなわち焦点の定まった集まりへの身体的・可視的な参入になる。集まりは不断に遂行される相互行為によってしか維持されえないから、分析の焦点は、対面した集まりへの参加者がいかに協働的に関与を組織化するかに当てられる [串田 1991 : 27]。こうして、他者との身体的なやりとりからシャウトが出現する様を可視化することで、諸個人がシャウトに動機づけられる際の動態をより具体的に示すことが可能になる。本稿では、シャウトする者に対する周囲からの身体的で可視的な働きかけのうち、特に有意な——すなわちシャウトの出現に明らかに影響を与えているとみなせる——ものを〈関与〉として記述し、その組織のされ方を、シャウトの出現時に基礎的な相互行為の構造として明らかにする。そこから「非決定性」の質を同定し、その上でこの接近法が拓きうる視点を示すことを目指す。

II 調査対象の概略

事例の記述と分析に先立ち、本章では必要な背景の説明を行う。なお、礼拝場面を直感的に把握しやすく提示するために、記述にあたっては筆者に独自の解釈用語を用いるが、それらは山括弧 (〈 〉) で囲むことにする。

礼拝で行われる「シャウト」は、「聖霊の働き」によって起こると解釈されており、それを行う個人の信仰の真正さを証明する行為の一つである。歴史的な原型は奴隷制時代の集団的な踊り「リングシャウト (ring shout)」だが、現在のように個人的なダンスの形態になったのは、都市下層階級の黒人社会においてペンテコステ派が定着した頃と考えられる。また 1960 年代以降は、一部の主流派教会の礼拝でも実践されるようになっていく。

大まかにいって、男性よりも女性の方が、年寄りよりも若者 (20 歳代から 30 歳代) の方が、シャウトを頻繁に行う傾向にある。またシャウトの実践には、周囲の明確で組織だった教え込みがなく、かなりの程度個人の自発性にゆだねられることも特徴的である。

現代的なシャウトに典型的な身体の動きは、速いテンポのリズムに合わせて、大きく足踏みをするとい

うもので、なかにはそれに加えて頭を前後に振る者も少なくない。またシャウトの前後には、当人が嘆き苦しむような「泣き」の表情を見せるのも特徴的である。1人のシャウトは1分間を大きく超えて持続することがなく、また一度踊り終わるとすぐに再び踊り始めることは稀である。ただし、いったん1人かごく少数の信者がシャウトを始めると、周囲の信者もそれに続くことが多い。筆者はこの現象をシャウトの〈連鎖〉と呼んでいるが、これは5分程度続くのが普通である [cf. ALLEN 1991 : 135 ; NEELY 1993 : 396]。

シャウトが〈連鎖〉している間は、音楽家によって「シャウト音楽」が演奏される。個々の演奏者や教会による違いはあるが、極端に速いテンポ（♩≒360）と、（主にドラムズと電気ベースによる）リズムを派手に強調した演奏は、地域と宗派を越えて全米の教会に共通している [cf. NEELY 1993 : 238-247]。シャウト音楽自体は単純なリズムの繰り返しだが、その始まりと終わりには、さらにくっきりとした輪郭の、2小節のみからなるメロディーが演奏される場合がある。これが繰り返されることで、会衆はシャウトの〈連鎖〉の始まりと終了を知ることができる。本稿ではこの短い旋律を〈シャウトのテーマ〉と呼ぶ。

猛烈な身体的動きを伴うダンスのシャウトは、「異言 (*glossolalia*)」と並んで、黒人ペンテコステ派教会における霊的なふるまいの代表である。さらに異言と比べても、シャウトの〈連鎖〉は、参列者に礼拝が〈クライマックス〉的場面に達したことを格別強烈に知らせる。シャウトとは喜ばしいものでもあり、「良い礼拝 (*good service*)」と言え、この〈クライマックス〉が1度以上達成された礼拝を指すのが普通である。

シャウトの発生は前もって予期できるものではないが、礼拝中に、特にシャウトの起こりやすい場面はある。その代表は、会衆歌や聖歌隊による歌唱の直後と、礼拝リーダー（説教師やミニスタ⁴⁾や礼拝の進行役）の発話が詠唱的かつリズムカルなものに移行した直後である。後者は説教 (*preaching*) の場面が多いので（他には祈りや異言の場合もある）、以下ではこの発話形態を〈説教節〉と記す。この時は会衆も、「起立」「挙手」「拍手」「(異言や祈りの) 発話」などを行っている場合が多い。会衆と礼拝リーダーの様子からうかがえるこの種の「〈クライマックス〉準備状態」のことは、〈活気のある〉状態⁵⁾と表記する。

次章よりシャウトが発生する場での〈関与〉のあり方を検討するが、各場面はすべて独立した事例からの抜粋である。記述の大半は筆者によるビデオ撮影を基にしているが、一部はフィールドノートと録音のみの記録に基づく（後者については記述時にその旨を記す）。

III シャウトにおける〈没入-関与〉関係

1 〈関与〉とは何か？

黒人教会の礼拝において霊的な行為がある場合には、その周囲の信者にも何らかの〈関与〉が確認できる。本節ではまず、シャウトの近辺で起こる〈関与〉とはいかなるものなのかを把握する⁶⁾。なおIII章とIV章で取り上げるのは、ミズーリ州セントルイス市の比較的小規模なペンテコステ派のA教会と、宗派はバプティスト派だが極めてペンテコステ的なB教会でのシャウト発生場面である。

【接触の回避（写真群1）】

(A教会；シャウトが〈連鎖〉を始めた直後)

シャウトをしているR（女性；20歳代半ば）に対して、B（男性；10歳代後半）がシャウトをしなが

ら背中を向けて突進してきた。Rの側にいた信者（女性；20歳代後半）と、別の信者（女性；40歳代前半；彼女とRの間には数メートル程の距離があり、その間には2人の素面状態の信者がいた）がその間に割って入り、2人の接触は免れた。

【赤ん坊を抱えたままの関与】

（A教会；シャウトの〈連鎖〉の最中）

賛美隊（*praise team*：会衆の歌唱を先導するための数名からなるグループ）のために備えつけられたステージ上で、賛美隊の一員N（女性；20歳代後半）が珍しくシャウトを行った。そのシャウトは非常に控えめなものだったが、会衆席にいたU（女性；40歳代前半）は赤ん坊を抱えたまま、わざわざ階段を上ってNの背後にやって来て、赤ん坊を片腕に、もう片方の腕をNの腹部に巻きつけるように添えた。

【接触回避】での〈関与〉は、シャウトに特有というよりは、むしろ日常レベルの行動と映る。すなわち、この行動の最も分かりやすい目的は事故や怪我の防止 [ALLEN 1991 : 141] であり、筆者自身もシャウトする者に対するこうした歩み寄りについて「聖霊に満たされている者は（意識的でなく）どこに行ってしまうか分からないので、誰かが付き添っていなければならない」という説明を受けたことがある。しかし、一見自明なこの説明は、〈関与〉をあまりに分かり易い目的に固定化している。たとえば、【接触回避】でBとRに近づいた信者の1人は現場から数メートルも離れたところにいたうえに、その間には素面状態の信者が2人もいた。また【赤ん坊】でのUは、片方の腕に赤ん坊を抱えていたうえに、Nからはかなり遠い位置にいた。しかも、Nは激しいシャウトを行う信者ではないから、この場面では事故や怪我は想定しにくかったはずである。実際のところ、そもそも明らかに危険な状況でのシャウトの発生はかなり稀なのである。

実際の〈関与〉は事故や怪我の防止よりもさらに動的な性格をもつのだが、それを把握するために、今度は一見事故防止に映る接近がシャウトをさらに加速させる事例を検討しよう。その典型は、シャウトを始めようとする信者の眼鏡を外すという、周囲の信者の行動である。

【眼鏡を取り外す】

（B教会；シャウトの〈連鎖〉の開始時）

クワイア歌唱の終了直後、数名のミニスタがシャウトを始め、音楽家もシャウト音楽を演奏し始めた。ミニスタらの席から数列後ろにいたS（女性；20歳代前半）が、叫び声を上げながら激しく頭を振ってシャウトを始めると、案内役（*usher*）が寄ってきてSの眼鏡をはずした。Sはシャウトしながら通路に出て、さらに激しく踊った。

一部の（特に若年の）信者は上半身を激しく上下に揺すってシャウトを行うから、周囲が眼鏡をかけている信者を気遣うのは、ある意味では当然である。ただしこうした眼鏡の取り外しは常に起こるわけではないし、筆者はSが眼鏡をかけたまま激しくシャウトする場面を何度も目にしているから、これも完全に実利的な行為とはいえない。むしろ注目すべきは、眼鏡をはずされた後のSがさらに激しくシャウトを始めた点である。もちろん、眼鏡を外さなかったとして同じように踊りの激しさが増したか否かは確かめようがないが、接近し手を差し延べるといふ行為が一義的にもつと思える「動きの制限」とは逆方向を向いた動きを、この行為が果たしていることは確認できる。

〈関与〉においてこのようにシャウトを積極的に後押しする方向が顕著に現れたものを、ここでは〈囁

し立て」と呼ぼう。これには、シャウトを行う者に対する掛け声や、接触、シャウト音楽に合わせた身体の軽い同調などがあるが、「眼鏡をはずす」ことにも、この方向性が少なからず見出せる。つまり、〈関与〉とはシャウトに単に従属した行為ではなく、シャウトをさらに助長しうる行為なのである。この方向がさらに極端に現れるのが、次にみる身体接触がシャウトを誘発する場面である。シャウトする者への身体的関与のほとんどがシャウトの開始後に行われるのに対して、ここでは〈関与〉が先行しており興味深い。

【同調行動による誘発】

(A教会；シャウトの連鎖の最中)

シャウト音楽に合わせてマラカスを振り鳴らしていたS（女性；50歳代前半）に、中央通路を挟んだ向こう側からミショナリ⁷⁾ H（女性；50歳代後半）が近づいて来た。HはSの片腕を掴み、Sと何度か視線を合わせながらその片腕を振り続けた。はじめは戸惑うような笑顔をHに向けていたSだが、約15秒後に（控えめに）シャウトを始めた。HはSのシャウト開始と同時に、Sの傍から立ち去った。

Sが教会活動には熱心だがめったにシャウトを行わない信者であるのに対して、Hは頻繁にシャウトを行う信者である。つまりこの場面は、接触者が自身の身体のリズムを被接触者に同調させることで、シャウトに強引に「誘った」場面と解釈できる。このように〈関与〉には、あからさまで、なおかつかなり積極的な役割を果たす場合もあるのだ。

ところで、この2つの事例をみると、(先の【接触回避】や【赤ん坊】とは逆に)今度は積極的に他者を操作しシャウトに誘う行為としての〈関与〉の姿が見えてきそうだが、この見方にも注意が必要である。確かに身体接触のもつ影響力の強さは並大抵ではないが⁸⁾、この側面だけを取り上げて、再び、〈関与〉をあるひとつの目的に従った行為だと言い切ることはできない。素面状態の信者の眼鏡をはずしてシャウトに「誘おう」とする者は誰もいないし、「接触による誘発」も一般化するにはあまりにも稀にしか起こらないからである。

2 〈没入－関与〉関係

ここでむしろ必要なのは、〈関与〉を「シャウトする者（これには潜在的にシャウトを踊る者も含める）」との間にある、動的な関係性のなかに位置づけることである。そうすると前節の事例群からは、シャウトが周囲の信者の〈関与〉に依存する場面があるということ、そして、シャウトと〈関与〉とは互いが互いを呼び起こすような関係にあること、さらに、シャウトとはシャウトする者と〈関与者〉との間の相互行為から出現することが見えてくる。

ここで、I章で述べたように、シャウトとそれに対する〈関与〉を、不断に遂行される相互行為により維持される「焦点の定まった集まり」のなかに据えよう。ただしここでは、ゴッフマンによる元の概念にある程度の変更を加える必要がある。というのも、ゴッフマンの想定した相互行為が、あいさつや会話といった、ひとつの集まりへの複数の参加者にその内部で明確に異なる位置づけが与えられないものであるのに対し、本稿では「シャウト」と「シャウトに対する〈関与〉」を、明確に異なった行為として把握するからである。そのため本稿では、焦点の定まった集まりという文脈において、シャウトを一関与のなかでも際立って忘我的なそれという意味で一〈没入〉という一般的概念でとらえることにする。これはシャウトを、ある特定の集まりへの関与でありながら、なお且つ「シャウトに対する〈関与〉」とは非対称的に位

置づけようとする見方を保持するための措置である。

このとき、シャウトが出現する焦点の定まった集まりで成立する関係を、「〈没入－関与〉関係」と呼ぶことが可能になる。次章以降では、シャウトが発生する際の焦点の定まった集まりがいかに関係化されるかについて検討するが、その際に記述および分析の単位として想定しているのが、この〈没入－関与〉関係である。

IV 〈没入－関与〉関係を成立させようとする〈要求〉と〈期待〉の身ぶり

前章で記述したのは、すでにシャウトの〈連鎖〉が始まった後の場面だったが、シャウトが発生する直前までは、集まりへの参加者たちの間で、ある程度の緊張感を伴った交渉が繰り返されることも多い。そこでは、〈没入－関与〉関係がある程度の時間差をとらないつつ成立する。本章で検討するのは、シャウトが発生するにいたるまでのそうした交渉の場面だが、そこから〈没入－関与〉関係の動態をよりよく把握することが可能になる。

1 〈要求〉の身ぶり

黒人教会でシャウトの〈連鎖〉が起こるきっかけは、1人かごく少数の信者のシャウトである [cf. HURSTON 1983 : 91]。この時彼らのシャウトは、礼拝の雰囲気（特に礼拝リーダーの口調、音楽の調子、会衆の雰囲気）から十分に予期できる場合もあれば、それほどでもない場合もある。十分に予期できない場面で起こるシャウトとは、礼拝リーダー、音楽家、会衆の多くにとって基本的に唐突なものだが、次に検討するのは、こうした唐突なシャウトから〈没入－関与〉関係が成立する場面である。

【〈要求〉の身ぶりとしてのシャウト（図1）】

（B教会；アナウンスの直前）

状況 礼拝中の〈活気ある〉状態が一息ついた直後。会衆はほぼ全員が着席していた。

要約 はじめはやや唐突の感があったミニスタBのその場での「足踏み」が、周囲の〈関与〉（シャウト音楽と喝采）を徐々に引き出し、結果的にシャウトの〈連鎖〉が発生した。

0 : 00 司会者Aが会衆に「それでは一緒に賛美〔筆者注：この文脈では喝采や拍手を意味する〕しましょう！」と語りかけると、会衆の多くが挙手、拍手、発話を行う。【1】

0 : 50 会衆は着席。Aは「ミニスタNよりアナウンスがある」ことを告げる。【2】

1 : 10 Nが前に出るのを待ちながら、（そしていかにもアナウンスの前に「もう一度だけ」という風に⁹⁾Aが「それでは、もう一度だけ神を賛美しましょう」と言うと、会衆から再び拍手が起こる。同時に、礼拝堂の前方、説教壇の真後ろ辺りに座っていたミニスタBが、跳び上がって両足で床を踏み鳴らし始める。【3】

1 : 30 音楽家（オルガンとドラム）は戸惑う様子を見せながらも、徐々にBの体の動きに合わせるようにシャウト音楽を演奏し始める。【4】

1 : 35 シャウト音楽とBのシャウトがほぼ同時に成立する。Aのスピーチは〈説教節〉に移行し、礼拝堂の前方にいる数名が立ち上がって手拍子を始める。【5】

2:20～ Bのシャウトはいったん収まるも、数名の信者のシャウトがそれに続いた。【6】

ふつうアナウンスは礼拝中で最も落ち着いた場面のひとつであるから、ここでのBの行動（【2】）は、周囲にとってかなり意外だったはずである。このことは、Bがその場で「足踏み」を始めてからシャウト音楽が鳴り始めるまでに、30秒近くもの長い時間がかかっていることから分かる（【3～5】）。〈没入－関与〉関係から眺めるならば、この30秒間のBの身ぶりは、その成立を達成しようとする身ぶり一すなわち「周囲を〈関与〉に、自ら（および周囲の一部）を〈没入〉に巻き込もうとする」身ぶりとして記述できる。したがって本稿では、この種のふるまいを「〈要求〉の身ぶり」と呼ぶことにする。

ところで、このようなギクシャクとしたシャウトの発生では、シャウトと「足踏み」は、異なった現れ方をする。一般的に、〈没入－関与〉関係が達成される前段階のシャウトしようとする者の身ぶりは、シャウトそれ自体と比較すると一段と誇張されがちである。とりわけ足踏みと叫び声が強調されることが多く、身体の動きもシャウトとは微妙に異なる。例えば、【〈要求〉の身ぶり】におけるBも、シャウト音楽が始まった段階になって初めて、彼特有のシャウトの足遣いを始めた（【5】）。（このため以下では、明らかに〈要求〉として行われる律動的な跳び上がりを、シャウトとは区別して（鉤括弧つきで）「足踏み」と表記する。）

この理由は、【〈要求〉の身ぶり】の場面における〈没入－関与〉関係が、もはや特定の個人間で構築されるものでなくなっているところにある。たとえば、Bの身ぶりは、近接した特定の誰かにというよりは、周囲の不特定多数の会衆に向けられていたという方が当たっている。そして、Bのシャウトに対する関与も、（音楽家の演奏するシャウト音楽に強力に引き起こされた）集合的なものであった。

〈没入－関与〉関係が、近接した者同士の相互行為の相に注目した時に浮かび上がる関係性なのに対し、〈要求〉の身ぶりはそれよりも広い会衆間の相互行為の相を見たときに現れるといえるかもしれない。両者の違いは微妙だが、〈要求〉の方が時間的に〈没入〉に先立ち、また〈要求〉の方が、その身ぶりが不特定な他者の方向を向いているように見える。その意味で、〈要求〉の身ぶりは、〈没入－関与〉関係の成立を目指しながらも、表現の上では、〈没入〉を表示するシャウトの延長線上に越え出ることなのである。

2 〈期待〉の身ぶり

次に検討するのは、【〈要求〉の身ぶり】のように〈没入－関与〉関係にシャウトが先走って現れる場面のいわば逆で、周囲の〈関与〉が誰かの〈没入〉を先触れする場面である。

【周囲の〈期待〉の身ぶり】

（B教会；礼拝の最終盤）

要約 Qの唐突な歌唱により会衆が大いに〈活気づいた〉ことを受けて、音楽家は、誰もシャウトを行っていないのにも関わらず、〈シャウトのテーマ〉を演奏した。続いてQがシャウトを始めたことで、シャウトの連鎖が起こった。

0:00 会衆席の最前列にいたQが、挨拶のスピーチから一転して、良く知られた曲を歌い始める。礼拝堂の前方に座る面々は、ほぼ総立ちでQに喝采を送る。【1】

1:20 音楽家が同曲を引き継いで演奏し、会衆はその妙技に対し挙手や発話を行う。【2】

- 2:25 曲が終わると、誰もシャウトを行っていないにも関わらず、音楽家が断続的に〈シャウトのテーマ〉を繰り返し演奏し始める。平行して牧師が会衆に発話を促す。【3】
- 2:55 最前列で着席していたQが、突然立ち上がってシャウトを短く行くと、音楽家はシャウト音楽を鳴らし始め、会衆は一斉に手拍子を始める。【4】
- 3:30 シャウト音楽はいったん止むが、会衆は手拍子を続け、音楽家も引き続き休むことなくテンポをまもって控えめに音をならし続けている。【5】
- 3:35 牧師が一瞬シャウトを行い、その間シャウト音楽が演奏される。【6】
- 4:10 数名のミニスタがシャウトを行い、シャウト音楽がしばらく演奏される。【7】
- 5:10 牧師が締めくくりの一言 (*remarks*) を述べる。この間も、ミニスタらの控えめなシャウトと異言的発話、小音量のシャウト音楽のリズムが、絶え間なく続く。【8】
- 6:05 牧師が(礼拝を終えるための)祝祷 (*benediction*) を行う。【9】
- 6:30 祈り終わると、牧師自らがシャウト音楽のテンポで1節歌う。音楽家が伴奏をつけ、10人程のミニスタも一斉にシャウトを開始した。(～8:30) 【10】

祝祷後にシャウトが起こること(【10】)は大変に異例だが、これは、Qのシャウトが引金となって礼拝の枠組みが大きく変化したことを意味する。さらに注目すべきは、Qが歌い終えてからシャウトを始めるまでの過程である。この間、Qの歌唱と音楽家の演奏に対して喝采を送った会衆は(【1～2】)、〈シャウトのテーマ〉によってさらに活気づいていた(【3】)。しかし、それに続いてQがシャウトを行ったことで初めて会衆は一斉に手拍子を始め(【4】)、そこから5分半にもおよぶシャウトの〈連鎖〉が続いたのである(【5～10】)。

ここでの(牧師や音楽家を含む)会衆全体の身ぶりは、(先の〈要求〉に対応させて)「誰かの〈没入〉を期待する」という意味で、「〈期待〉の身ぶり」と呼ぶことができる。B教会の礼拝において、Qが歌い終えてからシャウトし始めるまでの1分半(【2～4】)とは、決して短い時間ではない。そのあいだ中、礼拝堂は、誰かのシャウトをあたかも場面の頂点として待ち望んでいたかのような雰囲気満たされていた。その「今か、今か」と待ち構えるかのような雰囲気は、繰り返される〈シャウトのテーマ〉と、いざQのシャウトが起こったときの堰を切ったような手拍子(【4】)に表れている。このとき会衆の間には、シャウトへと向かう「気分」が共有されていたのである。

ここで、〈関与〉と〈期待〉との間にある関係は、先に見た〈没入〉と〈要求〉との間にあるそれと同型である。すなわち、〈期待〉の身ぶりは〈関与〉に時間的に先行し、その身ぶりは特定の誰かに向けられたものではない。そして、この「不特定の他者」に向けられた〈期待〉の身ぶりは、〈シャウトのテーマ〉として集合的にも表明される場合があるのだ。

V シャウトが不発に終わるとき

1 〈期待〉+〈要求〉と状況との間で行われる〈綱引き〉

ここまでは、たとえある程度の交渉を経たとしても、最終的には〈没入—関与〉関係が成立する事例を検討してきた。ただし、唐突な〈要求〉や状況にそぐわない〈期待〉は、礼拝や集まりの性格やそのタイ

ミングによっては、叶えられない場合もある。つまり、〈没入－関与〉関係が、信者の一部に強く望まれながらも実現されないのである。そこでは、〈要求〉や〈期待〉の身ぶりと「状況」との間に、ある種の〈綱引き〉状態が生まれる。

最初に取り上げるのは、「全国ゴスペル・クワイア&コーラス大会(National Convention of Gospel Choirs & Choruses)¹⁰⁾」(以下「大会」と記す)における若者(Youth & Young Adult;年齢は13-26歳)クワイアのリハーサル場面である。リハーサルは正式な礼拝ではないが、前後に祈りが行われ、練習の合間に宗教的なメッセージが伝えられることがあり、完全に礼拝と切り離された営みではない。そのため、リハーサルでもシャウトは十分に起こりうるし、この大会に限っていえば、平均的な教会よりも圧倒的に多数(かつ腕利き)の音楽家が演奏するなどの理由から、シャウトが期待される度合はむしろ大きかった。

【大会のリハーサル(図2)】

(大会会場ホテルの大部屋;リハーサルの最終盤)

状況 200名弱のクワイアの練習は2時間近くにおよんだ。最後の練習曲では際立った女性歌手がソロを歌い、練習中にもかかわらずクワイアは大いに〈活気〉づいた。しかし、リハーサル終了時刻が迫っていたため、クワイア監督のOは急いでいる様子である。要約 練習終了と同時に、音楽家がシャウト音楽の演奏を始め、クワイアもこれに手拍子で応えた。しかし、音楽監督のOはあくまでもこれを阻止しようとした。

0:00 最後の練習曲終了と同時に、打楽器奏者がシャウト音楽のリズムを刻み始めると、クワイアの大半が手拍子を始める。音楽監督のO(男性;20歳代半ば)は、音楽家に握り拳を見せつけて演奏中止を促すが、演奏もクワイアの手拍子も止まない。【1】

1:00 Oは、クワイアに向かっては「もう(リハーサル室を)出なければ」と語りかけ、音楽家には引き続き手合図を出し続ける。演奏はいったん収束に向かう。【2】

2:25 クワイア席中央辺りで1人の青年が立ち上がりシャウトを始め、音楽家もすぐにシャウト音楽を演奏する。周囲で20人程が立ち上がり手拍子等で〈囃し立て〉る。【3】

2:50 Oは音楽家に向かって、手合図を出し続けながら、「止めろ」と言う。【4】

3:00 他にも2人がシャウトを始めたが、シャウト音楽は収束に向かう。【5】

3:30 音楽が終了し、その十数秒後には3人のシャウトも収まった。クワイアからは「あ〜あ」といった残念そうな声と、(シャウトが止んだのは当然だと言わんばかりの)「その通り(That's right)！」という声とが飛び交った。【6】

リハーサルとは原則的に禁欲的なものであり、練習終了直後の楽隊によるシャウト音楽の演奏は、そうした緊張を一気に解き放つ性格のものであった。クワイアの大部分が手拍子で同調していたところからすると(【1】)、彼らのシャウトへと向かう気分は相当程度に共有されていたとみてよい。つまり、音楽家とクワイアの双方がシャウトへの期待を共同で膨らませたのである。一方のクワイア監督Oは、楽隊に向けては手合図で、クワイアに向けては言葉で、生み出されつつある〈期待〉の身ぶりを収束させようと懸命であった(【2~4】)。Oは3人がシャウトをすでに始めてしまったにもかかわらず音楽家に演奏の中止を要求したが(【4】)、ペンテコステ派出身というバックグラウンドをもつOが、ここまであからさまにシャウト行為を否定することは、珍しい。とはいえ、Oは一方的に要求の身ぶりを無視してきたわけではなく、

両者の間にはかなりの交渉が展開されたのである。

前章の2つの場面との最大の違いは、【リハーサル】の場面には、明確な〈クライマックス〉が欠落していることである。このことは、シャウト音楽が止んだ時にクワイアから漏れた残念そうな溜息からも窺える【6】。このように、〈要求〉や〈期待〉と状況との間に〈綱引き〉が起こる場面では、〈クライマックス〉の不在を感じさせる場面が少なくない。

ところで、ここで〈クライマックス〉と呼ぶものは、単に「シャウトを行うこと」ではない。このことを理解するために、もう一つの、より微妙な綱引きの事例である、Zバプティスト教会（主流派）の特別礼拝の一場面を検討しよう。

数千人のメンバーシップを誇る主流派のZ教会では、現牧師就任20周年を記念する特別礼拝が行われ、3時間ほどの間に、プロ、アマ双方の音楽家集団が次々にパフォーマンスを披露した。この種の特別礼拝には主催教会以外の教会からも多くの信者が訪れるのだが、この日Z教会の座席を埋め尽くした千人強の会衆のなかには、筆者の知るL教会のメンバー数名（うち女性は1名のみ；30歳代から40歳代前半）も訪れていた。L教会は、百人弱の小規模なメンバーからなる、ペンテコステ派的な教会である。

【特別礼拝】

（Z教会；礼拝の後半）

（記録はフィールドノートおよび録音のみ）

状況 出演はプロの演奏家集団で、リーダーが司会役も兼ねるという形態。

要約 演奏されたシャウト音楽に合わせてL教会信者がシャウトを行った。しかし、演奏はL教会信者の行為とは無関連に行われ、程なくL教会の面々は帰宅した。

00：00～03：00 司会者のスピーチが、軽やかな語り口から伴奏つきの〈説教節〉に移行する。喝采する会衆のなかには、異言を放ったり跳び上がった者もある。【1】

04：10 会衆席8列目の端でL教会信者らが激しい「足踏み」と発話を始めるが、司会者のスピーチが一息つくると、伴奏も彼らの「足踏み」も止む。【2】

05：05 司会者の発話が再び伴奏をとまなう〈説教節〉になり、会衆に「最高の賛美〔筆者注：この文脈ではシャウトなどを意味する〕を捧げよう！」「ここには聖別された（*sanctified*〔筆者注：シャウトをする〕）連中がいるかな？」等と語りかける。【3】

05：30 司会者が「1！2！…」と音頭をとり、〈シャウトのテーマ〉を繰り返す。【4】

06：45 L教会の信者たちが「足踏み」を始める。【5】

07：00 シャウト音楽が本格的に始まり、L教会の面々もすぐにシャウトを始める。（会衆のなかには、身を乗り出して彼らのシャウトを眺める者もいる。）【6】

07：50 シャウト音楽はいったん終了し、演奏も控えめになる。L教会信者はシャウトを続けるが、演奏にも司会者の口調にも熱がこもることもない。【7】

08：10 L教会信者は叫ぶような発話をし、再び「足踏み」音が強調される。【8】

09：00 シャウト音楽が起こり、L教会信者のみがシャウトを行う。【9】

10：15 演奏が控えめになる。L教会信者の1人が“Hey, come on, preacher!”と叫ぶ。【10】

10：55 L教会の信者は一段と力強く「足踏み」をし、時折大声で叫ぶ。【11】

12:15 司会者が、ゆっくりとしたテンポの曲をコミカルな調子で歌い始める。礼拝はさらに1時間弱続いたが、L教会の信者は程なく会場を後にした。【12】

この一連のやりとりを理解するためには、まずステージ上の司会者と楽隊によって、〈期待〉の身ぶりかなりの程度意図的に生み出されていたことを知る必要がある。つまり、ステージ上のパフォーマンスはおよそ会衆を「のせる」ためのものにすぎず（特に【3～4】）、会衆の〈要求〉の身ぶりに応えるという性格のものではない。このことは、司会者の微妙にコミカルな口調にも感じられるが、何よりも、L教会メンバーの「足踏み」が無視されていること（【2】）、そしてL教会メンバーがシャウトし続けているにも関わらずシャウト音楽が鳴り止んでいること（【7】【10】）からも明らかである。加えて、（上の記述では省いたが）バンドのメンバーはこのパフォーマンスの間じゅう、物理的には何の支障もなかったにもかかわらず、L教会の信者はおろか会衆席にもほとんど視線を向けていなかった。つまり、彼らの〈シャウトのテーマ〉やシャウト音楽の演奏は、リーダーたる司会者の指示にほぼ従ったものであり、ステージ上と会衆との間には相互作用が不在であった。換言すれば、ここで演奏されたシャウト音楽は、「ショウ版」としてアレンジされたものなのだが、L教会の面々はそれに合わせて「真剣に」シャウトを行ったということになる。

ところで、【リハーサル】に欠けていた〈クライマックス〉は、ここでも不在であった。それどころか、2度目のシャウト音楽が終了した直後のL教会信者の発話（“Hey, come on, preacher!”；【10】）がもっていたほとんど「抗議」とも思える迫力や、このパフォーマンスの最中にL教会の信者全員が帰宅したことを考えると、端的に言って、彼らはこのパフォーマンスに〈不満〉だったのだと言うほかない。

L教会信者のこの態度が注目に値するのは、これほど強烈に表明された〈不満〉にも関わらず、彼らのシャウトと「足踏み」が、実際にはシャウトが正しく発生した場合と同程度かそれ以上に長い時間続いたことである。すなわち、ここで2度起こった明確なシャウト音楽の演奏は、それぞれ50秒間（【6】）と75秒間（【9】）で、これは1人の信者がシャウトを行う時間としては十分に長い。また、〈シャウトのテーマ〉が始まってからシャウト風の音楽が完全に終了するまで6分半あまりの間も（【4～12】）、L教会信者はほぼひっきりなしにシャウトか「足踏み」を続けていた。しかも、彼らが最初に「足踏み」と発話を始めたのは、そのさらに1分半ほど前（【2】）なのである。つまり、少なくともシャウトとシャウト音楽の持続だけに限っていえば、これは意外なほどに長いものだったのだ。

これらの場面では、シャウトにおける相互行為の構造が、想定された〈クライマックス〉を欠いたものとして、ネガティブに現れている。どちらも、ある程度シャウトが持続したにもかかわらず、〈不満〉が表明された。つまり、ここで欠落していた〈クライマックス〉とは単なるシャウトではなかったということだ。また、本章の両事例で周囲の〈関与〉（〈囃し立て〉やシャウト音楽）が存在していたことから、これらの場面で〈没入－関与〉関係の正しい成立に必要なだったのは、単なる〈関与〉以上のものだったことも判るのである。

2 過剰なものとしてのシャウト

ところで、礼拝において基本的に好ましいものとされるはずのシャウトは、なぜこの2つの場面において回避されたのだろうか。この点について解説を加えておくことは、次章で行う全体の考察にも必要不可

欠である。

本稿のように、シャウト発生の場面を〈没入者〉と〈関与者〉という非対称的な関係間の相互行為として捉えると、両者は互いの行動を（ある程度まで）喚起し合う「相補的な同調関係」にあるといえる¹¹⁾。一方でシャウトの〈連鎖〉、すなわち複数の信者にシャウトが広まる過程は「対称的な同調関係」という。どちらもエスカレーションを生み出す関係だが、1つの〈没入-関与〉関係では、踊り手は1分間ほどで消耗した様子をみせて踊りを止めるので、エスカレーションには自動的なブレーキがかかる。他方、シャウトの〈連鎖〉過程には明確な抑制因子がみられないが、多くの場合一度の〈連鎖〉でシャウトする者の人数は数名を大きく超えることはなく、その長さは一般に5分間程度である。

ただしこれにも例外がある。筆者はこれまでA教会で数度とB教会で1度、シャウトの〈連鎖〉に歯止めが効かなくなった場面に遭遇したことがある。そのほとんどのケースで、信者らの興奮状態は〈連鎖〉の止んだ後もしばらく続き、結果的に礼拝の時間を大幅に（長い場合は1時間以上）延長せざるをえなかった。そうした場面を見た経験から言えば、同様な歯止めの効かない〈連鎖〉は【リハーサル】でも起こりえたらう。クワイア監督のOが生み出されつつある〈期待〉の身ぶりを阻止しようと懸命であったのはこのためであり、仮にOがこの〈期待〉を是認していたならば、リハーサルの終了時刻はかなり遅くにずれ込んだ可能性がある。また【特別礼拝】では、パフォーマンスを披露する各グループの持ち時間は15～20分程度と決まっていたが、こうした時間制限下では、各グループは、丁度良い時間帯に観客を「盛り上げ」、また丁度良い時間帯に「盛り下げる」必要がある[ALLEN 1991: 124-127]。こうした状況では、パフォーマンスは礼拝という枠内で会衆を活気づけるのだが、この時シャウトに顕著な動態も礼拝の枠組みのなかに飼い慣らされるのである。

ここで、礼拝という枠組みとシャウトを基礎づける相互行為との間に存在する、相反する関係に行き当たる。端的に言って、タイトに組まれたスケジュールの礼拝では、予期できないほどのシャウトの〈連鎖〉は、忌避されるべきものなのだ。その意味で、シャウトとは本質的に、儀礼の枠組みをも揺るがしかねない過剰なものなのである。

VI 考察と結論

本稿では、「シャウト」という行為を、信者間でその都度展開される対面相互行為を構成する一部分として記述してきた。本章では、冒頭で提示した「非決定性」の内実を相互行為の相で見極めたうえで、そこから得られる視点についても考察を行う。

1 シャウトにおける相互行為の構造と「ユーフォリア」

まずは、筆者が本稿で鍵概念として用いてきた「〈没入-関与〉関係」を整理することから始める。これは、シャウトを予め文化的に構築されたものとして解釈することをいったん括弧に入れ、シャウトが信者間でその都度切り結ばれる「関係」に基礎づけられていることを可視化するために用いた用語であった。この関係は、シャウトがスムーズに起こる場面では目立ちにくい、周囲の〈関与〉がシャウトを強く動機づける場面や（【同調】）、シャウトが起きそうだという「予兆」が長引くような場面（【〈要求〉の身ぶり】）

や【〈期待〉の身ぶり】）では、比較的観察しやすいかたちで現れる。

記述の中心をシャウト自体から〈没入－関与〉関係にシフトすることは、シャウトに文化的に構築された意味を付与するのとは異なる考察の過程を用意する。いま仮にシャウトを「記号」とすると、それは統語論的には特定の動きと、意味論的には「聖霊が存在することの標識」[NEELY 1993 : 496]と同定しうる。こうすると、不発に終わったシャウトは語用論的に「その場にふさわしくなかった」と説明されることになるが、ここで問題になるのは、はたしてシャウトを正しい文脈におくための条件が記述しきれるかどうかである。確かにそれは部分的には可能であろう。たとえば、【リハーサル】でシャウトが発生するに至らなかった理由の一つは、時間的な余裕がなかったというものだった。それに対して、A教会やB教会のようにシャウトが高頻度で起こる教会の礼拝時間は、かなりルーズなのである。ただし、これはシャウトを可能にする場面についての説明であって、シャウトの場面についての説明とはあくまでも異なる [cf. ゴッフマン 1985 : 27]。

ここで再び参考にしたいのが、ある程度のシャウトが起こったにも関わらず、その場面が（少なくとも一部の信者にとって）礼拝や集まりの〈クライマックス〉になりえなかった事例（V章）である。そこからは、シャウトすることよりも〈没入－関与〉関係の成立の方が有意な場合があることがわかるが、これは、シャウトの「正しい文脈」が外在的な条件の集合とは異質なことを物語っている。すなわち、ここで問われなければならないのは、シャウトにおける「〈没入－関与〉関係の十全な成立とは何か」なのである。

ここで、集まりをめぐるゴッフマンの議論に立ち戻る必要がある。ゴッフマンは、焦点の定まった集まりに最も重要でユニークな特性として、人々の関与の「自発性」—個人が集まりにおいて、「活動の虜になり、われを忘れ、のめり込む」というかたちで自発的に関与するという、「視覚的および認知的没頭」—をあげる [ゴッフマン 1985 : 29]。これはシャウトの忘我性にも通じるが、その要点は、個人の相互行為への自発的関与を支えるのが、同じ集まりにおける他者の自発的関与だということである。ここに提示されるのは、相互的な自発性によってはじめて成り立つ場面の存在だが、こうして、人々が相互に「自発的に関与する対象から出来上がっている世界」と、集まりに独自の「ルールによって刻まれ作りだされた世界」が完全に一致する時、集まりへの参加者は「ユーフォリア (euphoria ; 原義は多幸福感)、すなわち「(ゲームの) 面白さ」や「相互行為への安心した没入」を得られるのである [ゴッフマン 1985 : 33-34]。

このユーフォリックな経験をもたらす相互に自発的な営みという性質こそ、相互行為の相に見出せるシャウトの「非決定性」の内実である。シャウトが時に制御困難な程にエスカレートする理由もここにある。なぜなら相互的な自発性に支えられた行為は、その成り行きが相互行為の行く末に委ねられ、自己運動を起こすからである [cf. 菅原 2002 : 133]。

それでは、(時に逸脱しつつも) そもそもなぜシャウトは可能になるのか。牧師や音楽家といった、礼拝をリードする者たちの「技法」に収斂させた説明 [e. g. ALLEN 1991 : 100-101, 170-172] は、シャウトとそれに対する〈関与が本質的に各人の自発性に基礎づけられていることを考慮に入れておらず、短絡的である。これに対して、〈没入－関与〉関係のモデルを基礎にすると、仮説的にはあるが、次のような説明が提示しうる。まず、A教会もB教会も信者数が100人弱と300人程と小規模だが、そのなかでも頻繁にシャウトを踊ったりシャウトに〈関与〉する信者はさらに少ない。そのほとんどは、毎週の礼拝はもちろんのこと、平日の昼間や夕方の集まりにも参加する人々である。彼らのように、礼拝の場以外でも互い

によく知りあった者同士の間には、シャウトが発生する際の微妙な相互の動きを予期しうだけの「相互行為史」が形成されており [cf. ゴッフマン 1985 : 17]、それが、ある程度慣習的に制御されたシャウトを可能にしていると考えられる。

さらにこの仮説的な説明モデルは、次のような変奏にも適用できる。——筆者の観察によれば、シャウトの発生に基礎的なパターン（〈没入—関与〉関係）は多くの教会にかなりの程度共通しているが、シャウトの連鎖の開始や収束のタイミングなどの細部は、各々の教会で時に微妙に、時に大きく異なる。この事実が含意するのは、シャウトが各々の教会やさらにはその内部の特定の〈没入—関与〉関係のパターンに参加する人々の個別性によって作られており、彼らのその実践が多様性を生み出しうることである。こうしてシャウトは、汎黒人ペンテコステ的实践でありながらも、極めて個別的な出来事たりうるのだ。

この説明モデルは、自発的な共同関与のもう一つの特徴である「親密さ」にもつながっている。集まりにおける個々人の自発性は、相互行為する人々同士の関係をじかに表わすが [ゴッフマン 1985 : 31-32]、これは、〈没入—関与〉関係が成立する頻度と、そこへの参加者同士の間の親密性にある程度の相関が見出しうるという、筆者の印象に一致する。シャウトを可能にしている一般的なルールをこれ以上十分に明示できない理由も、ここにあるのかもしれない。各々の行為が自発的なことを知らせるのは、しばしば身体的で無意識的なメタ・メッセージであり、それらが、シャウトが開始され、エスカレートし、維持されるときに指標となっていると考えられる。しかし、その指標が個別的に決定されている限り、外からそのルールを把握するには、自ずから限界があるように思われるのだ¹²⁾。

2 トランスという身ぶり表現と「表情」

さて、いま再びシャウトを記号と想定すると、その記号内容は「^{シニファイエ}聖霊が存在することの標識」だが、それでは、シャウトの^{ニファイアン}記号表現としての過剰はいかに説明しうるだろうか。シャウトを〈没入—関与〉関係から記述することは、トランスという表現についても新たな見方を提示する。相互行為としてみたとき、シャウトとは自己目的的なコミュニケーション過程であり、そこで目指されているのは「関係性のゴール」 [北村 1989 : 272, 274] となるが、それはシャウトという身ぶり表現が「何か」を伝達しあうコミュニケーション過程の部分としては把握しきれないことを示唆する。

筆者はIV章で、〈没入—関与〉関係が成立する直前の〈没入者〉の身ぶりを「周囲の〈関与〉を〈要求〉する身ぶり」と言いなおしたが、シャウト自体も他者との関係を切り結ぶことへの希求の身ぶりであることに変わりはない。確かに両者は、〈没入—関与〉関係の成立前後にあっては微妙に異なった現れ方をするが、表現様式としては極めて近いところにあり、その表現の向かう先はいずれも同じである。

このことは、シャウトと〈要求〉の身ぶりにしばしば伴う「泣き」の表情に注目することでいっそう明らかになる¹³⁾。この「泣き」を、たとえば「悲しみ」や「怒り」といった特定の感情の表示としたのでは、シャウトという表現との間には恣意的な関係しか見いだせない。しかし、ひとたび「泣く」という行動を他者との関係性のなかに据えることで、シャウトという行為とそこに表現されるものとの間に、自然な一致をみることができる。なぜなら「泣く」ことは、その最も原初的なあり方において、近接する他者に自らが無防備な状態であることを一目でそうと分らせるような、そして他者が自らの方に歩み寄ることを自然と促すような表現だからである。ここに見出されるのは、シャウトという身ぶりに顕著なメタ・コミ

コミュニケーション的な質——すなわち、シャウトの表現の相における「表情性」である。

ここから、ペンテコステ派を特徴づけるもう一つの実践、すなわち「異言」とシャウトとの間に、見逃せない一致を発見できる。T. CSORDAS は、異言の無意味な音の羅列こそが、異言に通常言語にはない直接性をもたらし、神性とのコミュニケーションにおける通常言語の不十分さを我々に知らせると論じる。異言は、「意味論的次元を脱ぎ捨てる」ことで、「言説というカーテンの背後に、自然的な生における言語が、身体的な行為として根づいていることを暴く」のだ [CSORDAS 1990 : 24-25]。異言を理解することは、我々に、「概念的意味」に対するのと同じように、「身ぶりの意味」や表情にも目を向けることを促す。そうすることで我々は、反省的に、日常的な言語行為のなかにも身ぶり性と表情性が埋め込まれていることを再認識しうるのである。異言の分析を通じた概念的意味と身ぶりの意味の捉え直しは、シャウトの出現過程の微視的な記述によって、いっそう強化されるだろう。なぜなら、後者の方が文字通りの身体的なやりとりに依拠しているからである。

シャウトと異言の共通点はそれだけではない。両者の身ぶりを上のように再考することは、超越体験を神秘としてではなく、世界に根拠をもつものとして [CSORDAS 1994 : 11]、すなわち（その内側からというよりは表現の相を経由して）「日常」の生と連続したものとして把握する一助となりうる。シャウトも異言も、「聖霊の働き」として日常的な意識状態や自己からの超越的離脱と解釈されることでペンテコステ派の信仰と実践を支えているのだが、真島一郎 [1997] が指摘するように、憑依やトランスを、トランス状態にある者とそれを取り囲む者との間の日常的なコミュニケーションの過程として見ると、憑依の表現はオーディエンスの絶え間ない解釈の運動を誘発するような表現として理解できる。つまりシャウトや異言の場合、身ぶりの意味の過剰と、その身ぶりが特定の他者に向けられていないこと——これは〈要求〉の身ぶりについて述べた特徴だが一般的にはシャウトや異言にもあてはまる——のために、日常的な行為を記述するための概念的意味の範疇を越え出るベクトルが働くのだ。そしてその身ぶりが自ずから、周囲に「非自己」、すなわち「(憑依) トランス」の解釈を誘発するのである。

以上のシャウトの考察過程は、トランスダンスと音楽との間の関連性についても再考を促す。この二者の関係は古典的には「刺激—反応」図式で捉えられてきたが (I 章)、ここまでの議論を踏まえると、次の2点も同様に強調されるべきである。第一に、ミクロな対面相互行為としてシャウトをみたとき、シャウト音楽の強烈なリズムは、〈没入—関与〉関係という同調関係を構築するのに不可欠だということである。シャウトは周囲の〈関与〉抜きには十全に成立しエスカレートしないが、ここでリズムの媒介が他者の同調的な承認の身ぶりを可能にしていることは疑いえない。もう一点は、音楽が礼拝の場面を明確に分節することに関わる。しばしば指摘されるように、我々は視覚的に提示されるものに対しては目を背けることができるが、聴覚的な刺激に対してあえて耳を塞ぐことはあまりなく、そのために周囲の誰もが同じ音を耳にしていることを暗黙のうちに期待している。シャウトが「表情的」なのであれば、誰かのシャウトを告げるシャウト音楽や〈シャウトのテーマ〉もまた、(足踏みや叫び声とともに) そうした表情や「気分」を告げるのである。

3 結論

以上、I 章で「非決定的」と特徴づけたシャウトを、いったん具体的な相互行為の相にまで降り立ち、

そこから考察してきた。それによりシャウトを、相互の自発性に支えられ、時に逸脱するという危険をはらんだ、エスカレーションを伴う相互行為の一構成部分として一般化できた。それはまた、本来的に参与者に「ユーフォリア」をもたらす現象でもある。またそこから出発することで、シャウトの表現の相でも、その表情的な質を発見することができた。それは、周囲の他者の認知が身体化された身ぶりであり、まさにそのために「非自己」という解釈が生まれるような表現である。

憑依トランスダンスがユーフォリアを伴う焦点の定まった集まりに基礎づけられるという、この説明モデルは、どれほどの一般性をもちうるだろうか。この点を精確に述べるには、膨大な量の民族誌的記録を精査する必要があり、ここでは不可能だが、きわめて類似した現象が他のトランスダンス発生の事例にも少なからず確認できることは、指摘できる。たとえば、儀礼の即興性に限って言えば、V. CRAPANZANO はモロッコのハマドゥーシャ儀礼の研究において、音楽家集団と儀礼参列者の間の相互行為をある程度豊富に描き出したうえで、儀礼の成り行きがかなりの程度即興的に決められることを示唆している [CRAPANZANO 1973 : 192-207]。また、R. B. QURESHI による、インドやパキスタンのスーフィーのカッワーリ儀礼の詳細な記述からは、音楽（家）と会衆の間に明らかな即時的相互行為が確認できる [QURESHI 2006 : chap. 6]。さらに菅原和孝は、グイ・ブッシュマンの儀礼的ダンスについて、「あれほど深い熱狂を喚起するものでありながら、その熱狂にむかって人々を強制的に誘導するような装置をまったく欠いている」と指摘するが [菅原 1993 : 156]、ここには集まりへの参与者間の相互的な自発性の存在がうかがえる。一部の例外 [e. g. 菅原 1993] を除いて、これらの研究では宗教的解釈が優先される場合が少なくないが、ダンスを人々のミクロな相互行為として記述し直すことで、そこに、黒人ペンテコステ派のシャウトに通じるユーフォリアを見出せる余地があるのではないか¹⁴⁾。

ここで示唆したいのは、憑依トランスダンスの通文化的な比較研究の可能性だけではない。なぜなら、本稿の接近法の最大の特徴は、シャウトという超越体験が、身体的な相互行為と表現の相では、日常性と地続きだという可能性に開かれているところにあるからである。シャウトの成立に伴うユーフォリアも、絶えず呼び起こされる自発的な他者の関与に基礎づけられるという点では、日常会話で達成されるユーフォリアに通じている。またシャウトの表現も、他者の認知を身体化している限りにおいては、日常的なコミュニケーション過程の一部として了解しうる。これらの性質は、日常性と超越とが互いに出会う地点でこそ、意義深いものとして発見されるのだ。だとすると超越体験を言語化する試みによっては、その体験がいかに解釈されるかを示すと同時に、そこに出現する身体表現が対面相互行為空間のなかでいかに社会化されるのかという過程も明らかにされる必要があるだろう。

謝辞

この論文は、2008年に金沢大学に提出した学位論文の一部を大幅に書き直して成ったものである。学位論文執筆の際には中林伸浩先生、鏡味治也先生、西本陽一先生にご指導をいただいた。また、本誌の3名の査読者の方々にも的確なコメントと励ましをいただいた。最後に、米国での調査はセントルイス市ほかの黒人教会の方々のご理解とご協力なしには不可能だった。以上の皆さまに心からの感謝を申し上げます。

注

- 1) 20世紀初頭に米国で発祥したペンテコステ派は、聖霊の信仰を根拠にした「異言」や、「歌唱」および「信仰告白」といった経験的な実践を重視する。中央集権的なカトリックや主流派プロテスタントとは異なり独立志向が強く、現在も世界中で信者を増やしている。これらの理由から、ペンテコステ派は主流派のキリスト教への抵抗として捉えられてきた [COX 2001]。初期黒人ペンテコステ派は、礼拝の特徴から「アフリカ性」の残存 [HERSKOVITS 1990 ; HURSTON 1983]、もしくは奴隷解放前後の南部農村的な宗教の都市的形態と特徴づけられてきた [FRAZIER 1974 ; PARIS 1982]。
- 2) 本稿ではシャウトのことを「憑依トランス」ダンスではなく、「トランス」ダンスとする。これは、米国黒人教会における「聖霊」が個別の人格をもったようにはふるまわず（したがって抽象的な存在であり）、「憑かれた」というニュアンスに乏しいためである [cf. HINSON 2000 : 323, 371n2]。ただし、より一般的な文脈でシャウトを検討する場合には、他の研究との整合性を優先して、「憑依トランス」という場合もある。
- 3) これは特定のシャウトをめぐる「真偽論争」の形で表面化しうる [HINSON 2000 : 145]。
- 4) 「ミニスタ」の定義は教会によって多少の幅があるが、たいていは説教壇に立ってスピーチや祈りを行うことができる、宗教的なリーダーのことをいう。
- 5) これは現地の表現の筆者による流用である。現地で「活気のある (*lively*)」と言え、それは特定の教会や会衆を形容するための語であり、本稿のように特定の場面の瞬間的な雰囲気や印象は、実際には「聖霊の働き」として語られる。
- 6) 以下で記述する各場面からも明らかのように、現実に行われる〈関与〉には、近接した信者の歩み寄りもあれば、遠くで手拍子をする信者、シャウト音楽を演奏する音楽家、それを是認する牧師など、かなりの範囲におよぶ。一方、本稿で分析する場面では、それらの多数におよぶ〈関与〉のうち一部のみを選択して取り出す。これは全ての〈関与〉を取り上げることの不可能性もさることながら、本稿で行おうとしているのが、次節で提示する〈没入－関与〉関係という対面相互行為の構造を解明することだからである。
- 7) 「ミショナリ」も宗教的リーダーだが、説教壇からスピーチを行う資格がない場合が多い。
- 8) 筆者は【身体接触】に似た場面を全部で11例目撃したが（接触の形態にはこの他にも、「手を取って一緒に走り回る」や「額や腹部に手を押し当てる」などがあった）、このうち、被接触者のことを筆者がよく知らないという2例を除けば、全ての被接触者が普段シャウトを行わない信者であり、そして全11例中7例でシャウトが誘発された。
- 9) この日は、牧師就任の29周年記念特別礼拝が行われていた。このような礼拝で司会者を任される名誉が、Aをして会衆に何度も「賛美」を呼びかけさせたようだ。
- 10) これは全米から3千人ものクワイア歌唱者および音楽家が、開催都市のあるホテルに一堂に会し一週間に共に過ごすという、巡礼的な性格を持つものである。大会期間中は、(歌唱中心の)礼拝と、礼拝で歌うためのリハーサルが、連日行われる。
- 11) ここでは、個人および集団におけるシャウトのエスカレーションと収束のメカニズムを説明するために、G. ベイトソン [1986] のコミュニケーション理論における「分裂生成」の概念を下敷きにしてい

る。ただし、ベイトソンの理論が慣習的な行為や行動のエスカレーションを問題にするのに対し、ここでは、その場の行為が連鎖する過程もエスカレーションの問題に含めている。したがって、両者には次のような違いがある。すなわち、ここでの「相補性」は、「支配—服従」「見る—見せる」といった両極端の関係というよりは、一方のシャウトにもう一方の〈関与者〉が応えるというかたちの関係性である。また「対称性」は、実際に複数の信者がシャウトを「競って」行うことを意味せず、同パターンの行動が連鎖し全体としてエスカレートして見えることを指す。

12) もちろん、〈シャウトのテーマ〉のようにかなり明確な指標もあるが、これはその明確さゆえに「ショウ」としても利用される。この逆説は非常に重要なものだが、紙数の制限もあるので、本稿ではシャウトを基礎づける相互行為の構造を論じることと定める。

13) ROUGET [1985 : 111] も憑依トランスに「泣き叫び」が伴いがちなことを指摘する。

14) 他には、ROUGET [1985 : 112-113] も複数の民族誌的記述から、演奏家と踊り手の相互行為の記述を抜粋している。もちろん、過度な一般化には注意が必要である。米国社会における自発性や即興性の志向がペンテコステ派のそれに底通している可能性がある限り [CSORDAS 1994 : 18-19]、この見方も米国をはじめとする「近代」に偏ったものだという可能性がある。ただし、マダガスカルにおける憑依トランス儀礼 (*tromba*) の憑依に厳密な手続きが必要だと強調する EMOFF も、その儀礼を評価する美学的なイデオロギに日常会話の比喩が用いられていることを指摘していることは、示唆的と思える [EMOFF 2002 : 43, 75-76]。なぜなら、満足のゆく幸福な会話とは、焦点の定まった集まりにおけるユーフォリアが最も日常的に達成される場面だからである。

参考文献

北村 光二

1989 「コミュニケーションの行動学的理解」『応用心理学講座 11 ヒューマン・エソロジー』糸魚川直祐、日高敏隆（編）、pp. 268-284、福村出版。

串田 秀也

1991 「ゴッフマンの関与／没入論と相互行為概念：Encounter 論を中心に」『愛媛大学人文学会創立十五周年記念論集』愛媛大学人文学会（編）、pp. 27-51。

ゴッフマン、アーヴィング

1985 『出会い：相互行為の社会学』佐藤毅、折橋徹彦訳、誠信書房。

菅原 和孝

1993 『身体的人类学：カラハリ狩猟採集民グウィの日常行動』河出書房新社。

2002 『感情の猿＝人』弘文堂。

ターナー、ヴィクター・W.

1976 『儀礼の過程』富倉光雄訳、新思泉社。

ダグラス、メアリー

1983 『象徴としての身体』江河徹、塚本利明、木下卓訳、紀伊國屋書店。

田辺 繁治

- 2003 『生き方の人類学：実践とは何か』 講談社。
- 都留 泰作
- 2010 「バカ・ピグミーの歌と踊り：演技技法の分析に向けて」『インタラクシヨンの境界と接続：サル・人・会話研究から』 木村大治ほか（編）、pp. 295-315、昭和堂。
- ベイトソン、グレゴリー
- 1986 『精神の生態学 上』 佐伯泰樹、佐藤良明、高橋和久訳、思索社。
- 真島 一郎
- 1997 「憑依と楽屋：情報論による演劇モデル批判」『岩波講座文化人類学9 儀礼とパフォーマンス』 青木保ほか（編）、pp. 107-147、岩波書店。
- ルイス、ヨアン・M.
- 1985 『エクスタシーの人類学：憑依とシャーマニズム』 平沼孝之訳、法政大学出版局。
- ALLEN, Ray
- 1991 *Singing in the Spirit: African American Sa-cred Quartets in New York City*. University of Pennsylvania Press.
- BECKER, Judith
- 2004 *Deep Listeners: Music, Emotion, and Tranc-ing*. Indiana University Press.
- BERLINER, Paul
- 1978 *The Soul of Mbira: Music and the Traditions of the Shona People of Zimbabwe*. University of Chicago Press.
- BLACKING, John
- 1995 *Music, Culture, and Experience: Selected Papers on John Blacking*. The University of Chicago Press.
- BOURGUIGNON, Erika
- 1976 *Possession*. Ohio State University.
- COX, Harvey
- 2001 (1995) *Fire from Heaven: The Rise of Pen-tecostal Spirituality and the Reshaping of Religion in the Twenty-First Century*. Da Capo Press.
- CRAPANZANO, Vincent
- 1973 *The Hamadsha: A Study in Moroccan Ethno-psychiatry*. University of California Press.
- CSORDAS, Thomas J.
- 1990 Embodiment as a Paradigm for Anthropology. *Ethos* 18 (1) : 5-47.
- 1994 *The Sacred Self: A Cultural Phenomenology of Charismatic Healing*. University of California Press.
- EMOFF, Ron
- 2002 *Recollecting from the Past: Musical Practice and Spirit Possession on the East Coast of Madagascar*. Wesleyan University Press.

- FRAZIER, E. Franklin
 1974 (1963) *The Negro Church in America*. Schocken Books.
- FRIEDSON, Steven M.
 1996 *Dancing Prophets: Musical Experience in Tumbuka Healing*. The University of Chicago Press.
- HERSKOVITS, Melville J.
 1990 (1940) *The Myth of the Negro Past*. Bacon Press.
- HINSON, Glenn
 2000 *Fire in My Bones: Transcendence and the Holy Spirit in African American Gospel*. University of Pennsylvania Press.
- HURSTON, Zora Neale
 1983 *The Sanctified Church*. Turtle Island.
- KATZ, Richard
 1982 *Boiling Energy: Community Healing Among the Kalahari Kung*. Harvard University Press.
- LEX, Barbara W.
 1979 The Neurobiology of Ritual Trance. in *The Spectrum of Ritual: A Biogenetic Structural Analysis*. E. D' AQUILI et.al. (eds.) , pp.117-151. Columbia University Press.
- NEEDHAM, Rodney
 1967 Percussion and Transition. *Man* (N.S.) 2 (4) : 606-614.
- NEELY, Thomasina
 1993 Belief, Ritual, and Performance in a Black Pentecostal Church: The Musical Heritage of the Church of God in Christ. Ph.D. Dissertation, Indiana University.
- PARIS, Arthur E.
 1986 *Black Pentecostalism: Southern Religion in an Urban World*. The University of Massachusetts Press.
- QURESHI, Regula Burckhardt
 2006 (1986) *Sufi Music of India and Pakistan: Sound, Context, and Meaning in Qawwali*. Oxford University Press.
- ROUGET, Gilbert
 1985 (1980) *Music and Trance: A Theory of the Relations between Music and Possession*. The University of Chicago Press.

(2010年10月17日採択決定)

Emergence of Trance Dance through Face-to-face Interaction

A Case Study of Black Pentecostal Churches in America

NOZAWA Toyochi

Keywords: trance dance, face-to-face interaction, American Blacks, Pentecostal churches, music

Black Pentecostal churches in America are known for their intensive use of music during worship services, including congregational singing and dancing. This paper deals specifically with their ritual trance dance, called *shouting*, and describes the micro interactions among congregations where it occurs. By doing so, I aim to discuss an important but usually overlooked aspect of the mechanism through which (possession) trance dance emerges.

Anthropological inquiries have tried to understand the trance dance as a cultural representation; either by presenting how it is interpreted within each culture, or showing how it is culturally constructed, or both. Such perspectives are based on the semiotics that imparts conceptual meaning to the trance dance. While those perspectives of understanding *shouting* are undoubtedly important, they do not focus on its indeterminacy. Indeterminacy partly means its improvisational character: there are scenes and settings where *shouting* is expected, but no one can really predict when it will occur. Indeterminacy also means the ambiguous character in which a *shouting* is interpreted by others. Moreover, the heart of Pentecostal belief is also grounded in that indeterminacy: one must be “filled” with the Holy Spirit as a *gift*, and no one is supposed to be able to control it.

To make that “indeterminate” process visible, this paper starts by showing that *shouting* is dependent upon acts of other people surrounding the *shouter*, and how a *shout* emerges through the interactions between them. A typical occurrence of *shouting* goes as follows: During a pastor’s preaching or right after the choir finishes singing, someone who is visible to most in the congregation starts *shouting*, or gesturing as if he/she will *shout*. The musicians, by watching it, start playing “shout music,” and several members of the congregation begin *shouting*, as if to follow the music. There, its interactive characteristic is obvious.

There are even more micro interactions among the people in the congregation, and we can find them when those surrounding a *shouter* become “involved” in the *shouter’s* act. In previous studies, such involvements are mentioned only as the acts of preventing *shouters* from hitting people or things, or keep them from hurting themselves. However, when looked at more closely, one can observe that certain types of involvement support or even encourage *shouting*. Moreover, there are cases when someone who does not normally *shout* starts to do so after being touched by others in certain ways.

The interaction concerning *shouting* is one type of “focused gathering” (Goffman, 1985/1961) , which I call “Engrossment-Involvement Relationship (E-I.R.) ” (here, *shouting* is paraphrased as “engrossment”) . I shall use the E-I.R. as an analytical unit, rather than *shouting* itself, for it enables an examination of the dynamism of how individuals are motivated to *shout*; in other words, its indeterminate character.

Shifting the focus to E-I.R. allows us to notice cases where *shouting* does not arise smoothly but requires others’ involvement during the gradual emergence of *shouting*. In such cases, the individual who is about to *shout* will gesture in ways slightly different than that of *shouting* itself. i. e., by exaggerating the sound of stomping, and so on. I call that gesture “demanding,” because in an interactional sense it can be seen as demanding others’ involvement and engrossment (*shouting*) . The gesture occurs slightly before the *shouting*, and is geared more toward the public. Similarly, there are times when others’ involvement comes out prior to *shouting*. I call that the gesture of “expecting,” because it leads to the expectation that someone will start *shouting*.

Those terms are necessary to examine cases where shouting fails to occur satisfactorily. The *shouting* can sometimes expand so much that the worship service cannot be conducted regularly. In such cases, the worship leaders sometimes dissuade it, although congregations manifest gestures of demanding and/or expecting. In such cases, even if *shouting* occurs and lasts for some time, some in the congregation tend to show their dissatisfaction; sometimes even angrily. One can easily see that those cases lack some sort of “climax,” despite the fact that the *shouting* and involvement occur. Thus, to locate a satisfactory occurrence of *shouting*, one has to trace the full establishment of E-I.R.

To examine that, one has to go back to the nature of face-to-face interaction. As Goffman noted, one of the most unique and significant properties of focused gatherings is that each participant’ s spontaneous involvement is guaranteed only by others’ spontaneity. E-I.R. can be fully established only when mutual spontaneity is achieved, and that happens when participants feel a sense of euphoria, a phenomenon intrinsic to face-to-face interaction. That is the interactional nature that sustains the indeterminacy of *shouting*.

Shifting the focus from *shouting* itself to E-I.R. helps us investigate the representation and meaning of *shouting* from a different perspective than that of semiotics. When seen through interactions, *shouting* not only represents the material manifestation of the presence of the Holy Spirit, but is also a gesture of the longing to establish relationships with others. The fact that *shouters* and those who show the gesture of demanding often sob is a sign of that. There, we can find a meta-communicative and expressive nature in the gesture of *shouting*.

That property of the representation of *shouting* is common to *glossolalia* (speaking in tongues) , another significant Pentecostal practice. Both representations have an immediacy that the communication of vernacular expression does not, and both inspire us to rethink the significance

of gestural meaning in discourse and gesture. Besides, both are interpreted as acts of the Holy Spirit by believers, and as an altered state of consciousness or trance by non-believers. That is because their expressions transcend the conceptual meanings that describe our usual behaviors.

The arguments above suggest a viewpoint that allows us to grasp ritual trance dance and our ordinary behavior in the same way by examining them as face-to-face interactions. That approach is significant, because the unique properties I have discovered in *shouting* can be found where the vernacular and transcendent meet in the interactional and representational phase. Thus, to understand transcendental experiences, we need not only to study how they are interpreted and verbalized, but also to show how they are socialized in face-to-face interactional scenes.